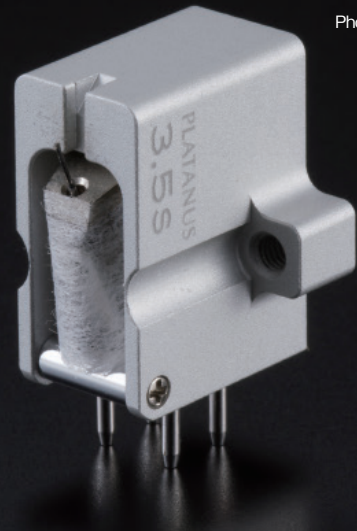


オーディオ評論家・石原俊が自宅試聴室に導入!

プラタナスのMCカートリッジ「3.5S」に魅せられた理由を探る

Text by 石原 俊
Shun Ishihara

Photo by 田代法生



PLATANUS 3.5S

MCカートリッジ ¥240,000 (税別)

Specifications

●発電型式:鉄芯入りムービング・コイル型●出力電圧:0.4mV(3.54cm/sec., rms, 45°)●再生周波数:10Hz~50kHz●インピーダンス:4Ω●chセパレーション:30dB以上(1kHz)●chバランス:0.5dB以内(1kHz)●カンチレバー:φ0.26mmボロン●針先:ダイヤモンド/ラインコンタクト(曲率半径3μm×30μm)●マグネット:ネオジウム●筐体:A6063アルミニウム合金●針圧:1.9~2.2g(標準2.0g)●コンプライアンス:7μm/mN(100Hz)●自重:12g●取り扱い:楯音舎

本誌試聴室で体験した 3.5Sにしかない魅力

プラタナス3.5Sに出会ったのは本誌試聴室だった。聴いた瞬間、前作の2.0Sとは何が違うと思った。清潔な音場と深々とした低音表現を併せもつ2.0Sは明らかにハイエンド市場を意識したものであった。それに対して3.5Sは、オーディオ的には極々常識的だが、2.0Sにはないサムシングがある。それを知りたくて、自宅システムに組み入れてみた。

プラタナスはフォノカートリッジ・エンジニア、助廣哲也氏の個人ブランドである(詳しくは前号の「日本のオーディオ」をお読みいただきたい)。ブランド創立のきっかけは、ネオジウム磁石を用いてアルニコ磁石のような音を出すことだった。3.5Sは助廣氏が初めて挑んだボロンカンチレバーのモデルである。アルミカンチレバーの2.0Sは出力が0.3mVだったのに対して、3.5Sは0.4mVと比較的高い。

自宅の主力プレーヤーはCSポート製で、載っているアームは同社のリニアトラック式

機とViVラボラトリのRigid Floatだ。まずはリニアトラック式に装着してみた。フォノイコライザーはオーロラサウンドのVIDAS Upremeで、MCヘッドアンプ入力(昇圧比16dB)を選択した。良い音である。だが音の方向性が少し違う。リニアトラックには2.0Sのほうが似つかわしい(事実、CSポートの試聴室では2.0Sを使って素晴らしい音を出していた)。

次いでRigid Floatに装着した。このアームはフェーズメーションのカートリッジを取りつけることが多いので、同社の昇圧トランスT・2000(昇圧比26dB)を介してフォノイコライザーのMM入力に繋いだ。悪くはないがオーバースペック感がなくもない。出力が0.3mVの2.0Sなら好結果が出ただろう。

音に優しく包容されるような 幸福感のあるサウンド

さて、どうしたものか……。ウチにはプレーヤーがもう一台あることに気づいた。部屋の片隅で眠っているDENONのDP-1300MKIIである。こ

のDD式プレーヤーを「新品のビンテージ機」に見立てて長い間愛用していたのだった。これに3.5Sを取りつけたらどんな音が出るのだろうか。

まずはフォノイコライザーのMCヘッドアンプ入力とつないだ。あっ、これか、と思った。本誌試聴室で直感した3.5Sの持つサムシングが上手く引き出せている。それはアナログ愛とでも呼べばよいのだろうか。音に優しく包容されるような、幸福感のあるサウンドなのである。具体的には、比較的高出力かつ絶対的高剛性なのでトーンアームやターンテーブルの影響を受けにくいことから、安価なプレーヤーでも良い音が得やすいということなのだが、その音からは助廣氏のアナログへの愛情がひしひしと伝わってくる。

その後、フォノイコライザーの入力をスウェーデン・ルンダー社製のMC昇圧トランス(昇圧比22.5dB)に変更した。ヘッドアンプ入力で感じられた優しさはやや後退したものの、ほどよいアバレ感が加味されて自分らしい音になったと思っ

ている。3.5Sからアナログの深さを教えてもらった。